



アーサー・ヘスケス・グルーム (1846～1918年)

英国人。1868年(明治元年)に来日。宮崎直と結婚、
並の日本人以上に男気のある日本人になりきっていたという。

六甲山頂の始祖。その別荘第1号の名が「101」である。

仲良し4人の茶飲み話で「ゴルフを為て見様ぢゃないか」となり、
手作りで4ホールを作った。それが1901年。

神戸ゴルフ倶楽部の誕生

1903年2月27日、神戸外国倶楽部で

「神戸ゴルフ倶楽部」創立総会開催。

9ホールとなり、5月24日開場式。会員120名。

遠くロンドンのゴルフ誌Golf Illustratedに紹介された。

翌年18ホール完成。3、4番以外は

その時のレイアウトが現在の原型となっている。

.....

日本のゴルフの父・グルームは72歳で黄泉の国へ、

いま神戸・鶴越の丘に眠っている。

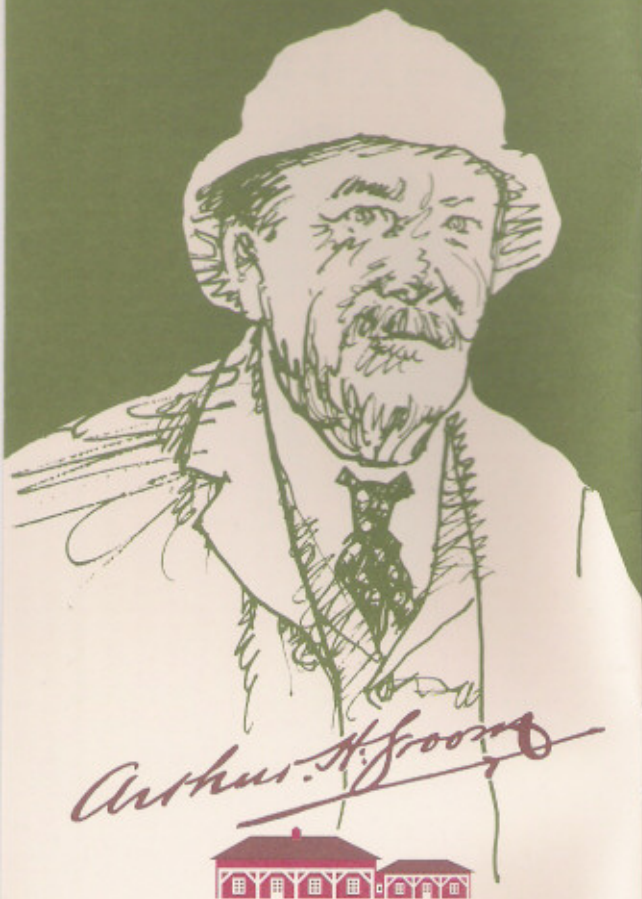


グルームからの伝言



KOBE GOLF CLUB

Founded in 1903



言い残し忘れたことがある。

諸君、

神戸ゴルフ倶楽部に、

これはいかん、あれはいかん、

そういうべからず集はない。

考えれば、分かるだろう。

先輩会員を見れば、分かるだろう。

分からなければ、聞けばよい。

教えてもらって、笑えばよい。

ここは、みんなが心おきなく楽しむ

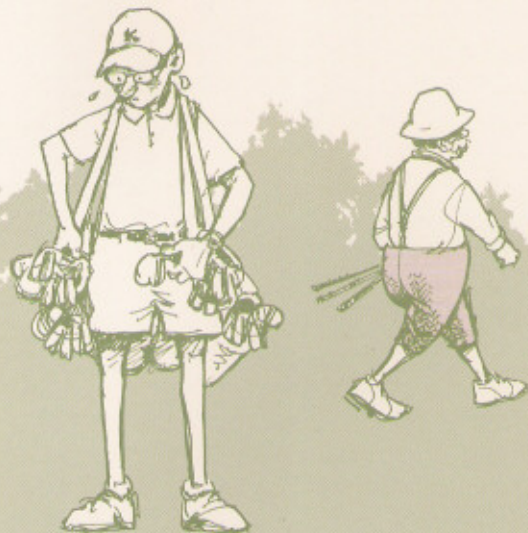
大人の遊び場だ。

Arthur Hesketh Groom

ここはアップアンドダウンがきつい。
クラブを運ぶのは、
キャディに手伝ってもらえばよろしい。
初代キャディの留吉以来、
ここのキャディはクラブ運びが専門だ。



ここではクラブ10本以内で楽しもう。
それでも4人分を担ぐキャディには大変だ。
各自、次のクラブを2、3本持って行こう。
留吉たちは楽になる。この心くぼり、
ゴルフ規則の冒頭に書いてあるではないか。



自分のボールは、自分の分身だ。
行方が心配なボールほどよく見ておこう。
人のボールの行方もよく見よう。
それが仲間同士のエチケットだ。
ロストボールほどつまらぬものはない。



わたしたちは留吉たちに
いちいち聞いたりなどしなかった。
距離や傾斜を読むのも、プレーの内だ。
うまく打てたら、自分の手柄。
しくじったら、笑って悔しがればよい。



ゴルフはやむなくコースを傷つける。
だから、ショット跡の始末は
ゴルファーに欠かせない約束事だ。
ルールの前にエチケットあり。
古来、それが、ゴルフというゲームだ。



昔、山頂茶店の婆さんは店前はもちろん、
途中の道もいつもきれいにしておった。
わたしはきれいが好きだ。
きれい好きな人が好きだ。
ゴルファーはみんなそうでありたい。



ゴルフは仲良く順番にプレーするゲーム。
すぐ打てるように準備していよう。
番が来たら速やかに打ち、
速やかに人に番をまわそう。
プレーのベースも、エチケットの一つだ。



しかし、人はさまざまだ。
調子が出ない人も、体力の弱い人もいる。
そういう人には「後続をパスさせる」
という結構な知恵が、ゴルフにはある。
——さあ、諸君、存分に楽しみなまえ。

